

レポート

性別の把握方法に関する実験的アンケート調査結果

～配慮あるアンケートの実施と SOGI を捉える調査手法の実装に向けて～

政策研究事業本部 社会政策部 副主任研究員 服部 保志

1. 企画の概要

(1) 背景

性的マイノリティに対する配慮の高まりを受け、各種書式やアンケート調査等において、性別をどのように把握するかという点が行政や企業、研究者にとって検討を要する論点となっている。性別欄や性別を把握する設問を廃止すること、「男性」「女性」以外の選択肢を設けること、自由記述や任意回答とすることなど、様々な対応が行われている。

内閣府男女共同参画局「ジェンダー統計の観点からの性別欄検討ワーキング・グループ」の取りまとめ（令和 4 年 9 月）¹では、男女別のデータを確実に取得することが重要との観点から、「性別欄の有無に関する拙速な対応は慎むべき」との見解が示された。また、同取りまとめでは、「性別欄の選択肢がこれまでどおり男性か女性の二択だけで十分であるかについては、議論すべき余地がある」とされながらも、性別の把握方法に関する個別の検討が必要であることや、他国では長年の検討の末に対応方針が決められていることなどから、「男女以外のデータを取得する場合の、適切な質問項目や選択肢を示すまでには至らなかった」と締めくくられている。

性的マイノリティ、特に性自認におけるマイノリティにとって配慮のある性別の把握方法とは何か。また、性のあり方に関する適切な把握方法とはどのようなものか。この点について、行政や企業、研究者でも、十分な根拠をもって性別の把握方法を設計できずにいる。こうした現状を踏まえ、適切な質問項目や選択肢の検討など、性別の把握方法に関する調査研究を企画した。

(2) 企画目的

本調査研究は、特にアンケート調査における性別の把握方法を整理したうえで、様々な把握方法の比較検討に資するデータをを得ることを目的とする。

(3) 実施内容

上述の目的を踏まえ、諸外国および国内における性別の把握方法に関するデスクトップ調査、性的マイノリティ当事者団体等に対するヒアリング調査、インターネットモニターを対象とした実験的アンケート調査を実施した。ヒアリング調査に協力をいただいた団体および専門家は図表 1 のとおりである。

本レポートでは、デスクトップ調査およびヒアリング調査から得られた知見のポイントおよび実験的アンケート調査の調査結果を報告する。

¹ 内閣府男女共同参画局「ジェンダー統計の観点からの性別欄の基本的な考え方について」（<https://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/wg-seibetsuran/pdf/honbun.pdf>（外部リンク）（最終アクセス:2026 年 6 月 25 日））。ワーキング・グループについては、<https://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/wg-seibetsuran/index.html>（外部リンク）（最終アクセス:2026 年 6 月 25 日）を参照のこと。

図表 1 ヒアリング調査に協力いただいた団体・専門家(順不同)

一般社団法人性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会(略称:LGBT 法連合会)
一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会
特定非営利活動法人 ReBit
(任意団体)label X
(任意団体)Rainbow Tokyo 北区 時枝穂氏
専修大学 経済学部 教授 杉橋やよい氏

(4) 検討の対象範囲

本企画で想定する性別の把握方法は、広くアンケート調査における把握方法である。また、アンケート調査のなかでも、匿名のアンケート調査を主に想定している。アンケート調査の目的や具体的な調査方法について、特段の限定を設けておらず、実際のアンケート調査の設計にあたっては、個別の目的や事情に応じて検討がなされることを念頭に置いている。

本レポートにおいて、「性別の把握方法」という表現で用いる「性別」は、各種機関における取扱いや調査等における定義を除き、アンケート調査等において「あなたの性別は何ですか。」と尋ねられたときに、回答者が想定する情報や調査主体が意図する情報を念頭に置いている。具体的には、戸籍上の性別、身体の性別、見た目の性別、自認する性別、ジェンダーなどがあてはまると考えられるが、本レポートで見るとおり、調査主体によって意図されている定義は一樣ではなく、また、アンケートへの回答者が認識する性別の定義も一樣ではないことから、様々な定義や解釈がされうるものとして「性別」の定義を据え置いている。

なお、性的マイノリティについては性的指向および性自認(ジェンダーアイデンティティ)という 2 つの性の側面から捉えられることが多いが、本レポートでは、性的指向と性自認のうち、後者の把握方法について検討している。性別を把握することは多くのアンケート調査で実施されており、それゆえにアンケート調査を設計する際の論点となりやすいことから、本企画ではまずは、性別(および性自認)の把握方法を検討対象とすることとした。ただし、性的指向に関しても把握方法の検討が必要という意見もあり、筆者も同様の考えである。

(5) 調査研究協力者

本調査研究は、科学研究費プロジェクト「性的指向と性自認の人口学の構築——全国無作為抽出調査の実施」(JSPS JP21H04407)に参画する研究者グループ(以下、SOGI 人口学科研費チーム)の共同企画として実施し、当事者団体等に対するヒアリング調査や実験的アンケート調査の設計に関与いただいた。株式会社クロス・マーケティングには、インターネットモニター調査における調査票作成等に協力いただいた。

(6) 本レポートと関連する研究等

上述のとおり、本企画においては SOGI 人口学科研費チームに参加する研究者の協力を得た。本企画における調査結果を用いた論文等として、平森大規(2024)「性別を「その他」と回答する人はみな性的マイノリティなのか?—ジェンダー統計の精緻化に向けたクィア人口学的分析—」『国際ジェンダー学会誌』22, 52-65.²などがある。

また、冒頭の内閣府男女共同参画局におけるワーキング・グループの取りまとめにあたっては、構成員から意見が提示されている。そのうち、SOGI 人口学科研費チームに参加する釜野さおり委員が提出した資料において、

² 同論文は J-STAGE ウェブサイト https://doi.org/10.32195/isgs.22.0_52 (外部リンク) (最終アクセス:2026 年 6 月 25 日) などからアクセスできる。

「三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングにおいて、…(中略)…参考となる知見が今後公開される予定である。調査における性別の設問検討の際にはその結果も参照されたい」と言及された「知見」こそ、本企画におけるヒアリング調査や実験的アンケート調査結果にあたる³。同ワーキング・グループの閉会から本レポートの公開まで時間を要したことについて、ここにお詫び申し上げます。

(7) 留意事項

- 本企画は当社の独自企画であり、企画の名称は「性別等の把握方法の調査研究」である。
- 本レポートにおいて言及しているデスクトップ調査結果およびヒアリング調査結果は、2022 年 10 月までの情報に基づく。
- 本企画と関連動向との時系列上の関係は次のとおりである。本企画は 2022 年 5 月に開始し、ヒアリング調査を 2022 年 9～10 月、インターネットモニター調査を 2023 年 2 月に実施した。この間に、冒頭で述べた内閣府男女共同参画局におけるワーキング・グループが開催されていた。その後、2023 年 6 月に性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律(以下、「理解増進法」)が公布・施行された。なお、2023 年度および 2024 年度に理解増進法に関連した学術研究等(内閣府委託事業)を当社が受託のうえ遂行した⁴。2024 年度(令和 6 年度)の内閣府委託事業報告書では、性的マイノリティを調査対象とした調査における性別の把握方法に関する検討および一定の整理がなされている。
- 理解増進法においては、本レポートで「性自認」と表現する概念に対して、「ジェンダーアイデンティティ」という言葉が用いられている。本企画の実施過程においては「性自認」という言葉を用いていたことから、本レポートにおいては「性自認」という表現を用いている。「性自認」を「ジェンダーアイデンティティ」と読み替えるとする見方もあるが、少なくとも本レポート公開時点では、「ジェンダーアイデンティティ」という言葉をアンケート調査で用いることは想定しておらず、各種アンケート調査の調査票や調査結果の報告において「ジェンダーアイデンティティ」という言葉を用いることが認められるかどうかについては、判断を保留としている。
- 本レポートにおいて、「性的マイノリティ」とは、社会的に少数派とされる性的指向・性自認(性表現を含む)をもつ人々の総称とする。「性的マイノリティ当事者」とは、上記の性的マイノリティに該当する人本人を指す。特にアンケート調査においては、カテゴリーを指す性的マイノリティという言葉のほか、回答内容から回答者が性的マイノリティ当事者と判定されるかどうかなど、特定の人について記述する際に性的マイノリティ当事者という言葉を用いる。加えて、本レポートでは、性的マイノリティのなかでも、トランスジェンダーなど性自認におけるマイノリティを念頭に置いていることから、文脈に応じて、「性自認におけるマイノリティ」「性自認におけるマイノリティ当事者」という言葉を用いる。
- アンケート調査への回答結果から性別(出生時性や戸籍性など)と現在の性自認が一致しない、または、トランスジェンダーと認識していると読み取れる回答パターンを示す状態を、「トランスステータスを有する」

³ 内閣府男女共同参画局「ジェンダー統計の観点からの性別欄検討ワーキング・グループ(第 7 回)」における「資料 4 釜野さおり構成員提出」より抜粋。同ワーキング・グループ第 7 回の資料は、<https://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/wg-seibetsuran/sidai/07.html> (外部リンク) (最終アクセス:2026 年 6 月 25 日)を参照のこと。釜野さおり構成員による本企画への言及は、同構成員提出資料 44 ページ末尾に記載されている。

⁴ 理解増進法に関連する学術研究については、<https://www8.cao.go.jp/rikaizoshin/research/index.html> (外部リンク) (最終アクセス:2026 年 6 月 25 日)を参照のこと。当社は、2024 年度(令和 5 年度)「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律第 9 条に規定する学術研究等の遂行に資する既存研究等の調査分析」および 2025 年度(令和 6 年度)「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度の把握及び理解増進に係る研究に当たり留意すべき事項等の調査・研究」を実施した。

と表現する⁵。

- アンケート調査結果の報告における構成比の数値は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、個々の集計値の合計は必ずしも100%とならない場合がある。

2. デスクトップ調査結果

性別の把握方法の検証状況を整理するため、諸外国および国内の事例に関する文献調査を行った。本調査研究におけるアンケート調査の設計にあたり、デスクトップ調査から得られた要点を以下にまとめる。

(1) 主な性別の把握方法の分類

諸外国の政府統計(国勢調査等)において検討・導入された性別の把握方法および日本国内で検討されている性別の把握方法を整理した(図表2(p.6))⁶。諸外国の例をみると、多様な性のあり方を踏まえた性別の把握は、選択肢を検討するだけではなく、どのような設問文にするか、ひいては出生性なのか、回答者の認識なのか、ジェンダーなのかなど、どのような性別を把握したいかという点から検討されていることがわかる(この点は、「8.得られた主な知見と今後に向けた論点整理」において改めて取り上げる。)

性別の定義のほかに、性別の把握のためにいくつの問いを設けるか、すなわち、設問数の観点からも整理ができる。諸外国の例をみると、性別を1設問で把握している場合、2設問で把握している場合、3設問で把握している場合が確認された。それぞれ、1ステップ方式、2ステップ方式、3ステップ方式と呼称のうえ、大別した^{7 8}。

1ステップ方式は性別を1設問で把握する方法である。例えば、「男性」「女性」のほかに「その他」などの選択肢を設けつつ、1つの設問で把握する場合が当てはまる。ただし、設問数が1問であるというのみで、把握したい性別が例えば、性別(sex)に限られるわけではない。戸籍性を把握する場合も、戸籍性のみを把握するのであれば1ステップ方式といえる。

2ステップ方式は性別を2設問で把握しようとする方法である。設問を2問用いることで、生まれた性と異なる性のあり方をしているかどうかを把握しようとする。2ステップ方式において、トランスステータスの有無を把握する方法は2通りある。1つはアメリカのHousehold Pulse Surveyのように、1問目で出生性を把握し、2問目で現在男性か女性かトランスジェンダーかを把握する方法である。トランスステータスの有無を直接的に回答者に尋ねていることから、ダイレクト式と呼称することとする。もう1つの方法は、カナダ国勢調査のように、1問目で出生性を把握し、2問目で現在のジェンダーを把握する方法である。ダイレクト式との違いは、1問目と2問目への回答内容が一致するかどうかによりトランスステータスの有無を把握する点である。1問目と2問目の回答内容の掛け合わせによってトランスステータスの有無を把握するため、クロス式と呼称することとする。

⁵ 例えば英国では、性別および性自認の把握方法を開発する過程で、性別と性自認が一致しないかどうか、あるいは、自らをトランスジェンダーだと認識しているかどうかといった当事者性の有無を示す概念として“trans status”(日本語読み:トランスステータス)という用語が用いられている。

⁶ 内閣府男女共同参画局「ジェンダー統計の観点からの性別欄検討ワーキング・グループ」の会議資料においても、いくつかの国外・国内の事例が照会されている。先述の留意事項に記載した時系列のとおり、本企画と同ワーキング・グループは同時期に立ち上がっており、本レポートで取り扱っている性別の把握方法の事例は当社独自に調査をしたものである。

⁷ 「3ステップ方式」という名称は、SOGI 人口学科研費チームの平森大規氏による。海外では“two-question method”や“two-step approach”という表現が存在していたことを踏まえたものである。例えば、Tate, C. C., Ledbetter, J. N., & Youssef, C. P. (2013). A two-question method for assessing gender categories in the social and medical sciences. *Journal of sex research*, 50(8), 767–776. などがある。より近年の事例として、European Commission (2023) Guidance note on the collection and use of data for LGBTIQ equality. https://commission.europa.eu/strategy-and-policy/policies/justice-and-fundamental-rights/combating-discrimination/equality-data-collection_en (外部リンク) (最終アクセス:2026年6月25日)では、“a two-step approach asking first about gender identity and then about whether the respondent’s gender identity differs from their sex assigned at birth.”と紹介されている。

⁸ より詳細に性別を把握するためには、当然ながら3設問よりも多くの設問を要することがある。

3 ステップ方式は、性別を 3 設問で把握しようとする方法である。今回のデスクトップ調査では、イギリス国勢調査と SOGI 人口学科研費チームによる大阪市民調査の 2 つの例が確認された⁹。ダイレクト式の 2 ステップ方式との違いは、トランスステータスの有無そのものだけでなく、3 設問目において、現在のジェンダー(または認識している性別)が何かを把握しようとしている点である。また、クロス式の 2 ステップ方式との違いは、2 設問目において、出生性と現在のジェンダー(または自分で認識している性別)が同じかどうかを明示的に把握している点である。sex(または出生性)、トランスステータスの有無、現在のジェンダー(または自分で認識している性別)の 3 つを、個別の設問で把握する仕組みとなっている。

(2) 性別の把握方法に関する検討状況

図表 2 で示した性別の把握方法の例は、各国・各機関において適切と考えられる把握方法の検討が行われた結果である。例えば、イギリス(ウェールズおよびイングランド)については、2021 年国勢調査に向けて研究計画が策定され、2016 年ごろから関連したデータの収集や実験が行われており、その過程や結果が詳細に公開されている^{10 11}。

イギリスにおける検証の方向性は、社会的受容性(public acceptance)、容易に理解できること(readily understood)、良質なデータを提供できること(capable of providing good-quality data)の 3 つの基準を満たす把握方法を開発することで、そのための検証方法として、アンケート調査およびインタビュー調査などが行われた。例えば、1 万人程度を対象とした試験的アンケート調査の結果から、国勢調査に性自認に関する項目を入れた場合の回答中断率は 1%程度であること、イングランドの回答者の約 5%、ウェールズの回答者の約 10%が性自認の質問をスキップするものの、アンケートの回答自体は完了するつもりがあるとしているため、受容性の観点からは性自認に関する調査項目を設けることは差し支えないと判断している。また、いくつかの性別の把握方法について、回答率の差、エラー回答率の差、性別(sex)についての回答内容に違いが生まれるかどうかなどを把握するための検証がなされている。

国内では SOGI 人口学科研費チームによる研究¹²のほか、株式会社インテージによる調査において 4 つの把握方法案について、「わかりやすさ」「自分の性別を的確に表せているか」「セクシュアルマイノリティ(LGBT 等)に配慮された選択肢だと思うか」の評価と総合評価・相対評価が把握されている¹³。

⁹ イギリスの例は“two-step approach”などと呼ばれてはいるものの、実際の設問は選択式の設問が 2 問と 2 問目から枝分かれた自由記述欄において性自認の具体を回答する形で実質的に 3 つの設問が用いられていることから、本レポートにおける整理上 3 ステップ方式に分類する。

¹⁰ イギリス政府(2018)「Help Shape Our Future The 2021 Census of Population and Housing in England and Wales」https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/765089/Census2021WhitePaper.pdf(外部リンク)(最終アクセス:2026 年 6 月 25 日)

¹¹ 内閣府(2024)「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律第 9 条に規定する学術研究等の遂行に資する既存研究等の調査分析」(令和 5 年度内閣府委託事業)では、EU、カナダ、チリ、オーストラリア、ネパール、南アフリカにおける国レベルの調査について情報が収集されている。

¹² SOGI 人口学科研費チームによる 3 ステップ方式に関する研究成果等は、Hiramori, Daiki, and Saori Kamano. 2020. “Asking about Sexual Orientation and Gender Identity in Social Surveys in Japan: Findings from the Osaka City Residents’ Survey and Related Preparatory Studies.” *Journal of Population Problems* 76(4), 443-66.(郭水林・小西優実訳, 2021, 「性的指向と性自認のあり方を日本の量的調査でいかにとらえるか——大阪市民調査に向けた準備調査における項目の検討と本調査の結果」『人口問題研究』77(1), 45-67. <https://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/21770104.pdf>(外部リンク)(最終アクセス:2026 年 6 月 25 日))などを参照されたい。

¹³ 株式会社インテージ「インテージ 知る Gallery」2020 年 12 月 2 日公開記事. <https://gallery.intage.co.jp/seikatsushadb-9/>(外部リンク)(最終アクセス:2026 年 6 月 25 日)

図表 2 性別の把握方法の例

	1ステップ方式		2ステップ方式		3ステップ方式	
概要	1つの質問のみで把握する。ただし、性別(sex)について把握するとは限らない。		性別の設問とトランスジェンダーを把握する設問。(仮称:ダイレクト式)		性別の設問、性自認が性別と同じかどうかを把握する設問、現在の性自認を把握する設問を設ける(2つ+自由記述欄、2つ+サブ設問、3つの設問など)。	
例	「その他」を用いた例	オーストラリア:2022国勢調査におけるPersonal Form ^{注1, 注2}	アメリカ: Household Pulse Survey2021 ^{注3}	カナダ: 2021国勢調査における3A Questionnaire ^{注1, 注4}	イギリス(イングランドおよびウェールズ): 2021国勢調査におけるindividual questionnaire ^{注1, 注5}	日本: SOGI人口学科研費チーム: 大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート ^{注6, 注7}
1設問目	あなたの性別をお答えください。 1.男性 2.女性 3.その他	この人(回答者)は、 1.男性 2.女性 3.ノンバイナリーセックス	オリジナルの出生証明書に記載されている、出生時に割り当てられた性別はどれでしたか。 1.男性 2.女性	あなたの出生時の性別はどれですか。 性別とは出生時に割り当てられた性別を指します。 1.男性 2.女性	あなたの性別はどれですか。 ※16歳以上の方には、性自認に関する設問が後ろにあります。 1.女性 2.男性	あなたの性別に○をつけてください。[出生時の戸籍・出生時の性別](○は1つ) 1.男性 2.女性 ※「出生時」とは、生まれたときにもっとも近い時点のことをさします。
2設問目	-	-	あなたは、現在あなた自身を男性、女性、あるいはトランスジェンダーのいずれと表現しますか。 1.男性 2.女性 3.トランスジェンダー 4.上記以外	あなたのジェンダーはどれですか。 1.男性 2.女性 3.または具体的に記載してください:	あなたが現在自認するジェンダーは、出生時の性別と同じですか? ※この質問への回答は任意です。 1.はい 2.いいえ	あなたは今のご自分の性別を出生時の性別(上で○をつけたもの)と同じだと考えていますか。今の認識をお答えください。(○はいくつでも) 1.出生時の性別と同じ 2.別の性別だと捉えている 3.違和感がある
3設問目	-	-	-	-	<前問でいいえの場合> →(性自認をお答えください)	<前問で2, 3の場合> 今の認識にもっとも近い性別(○は1つ) 1.男 2.女 3.その他(具体的に)

(出所) 当社作成。翻訳は筆者による。

(注 1) 国勢調査は世帯主が回答するほかに、個人が回答することが可能となっている。

(注 2) オーストラリア統計局ウェブサイト <https://www.abs.gov.au/census/census-media-hub/resources/education#sample-copies-of-the-2021-census-paper-forms> (外部リンク) (最終アクセス:2026 年 6 月 25 日) より調査票を取得可能。

(注 3) アメリカ国勢調査局ウェブサイトより設問を確認することができたものの、2026 年 6 月現在当該ウェブサイトはリンク切れとなっている。

(注 4) カナダ中央統計局ウェブサイト https://www.statcan.gc.ca/en/statistical-programs/instrument/3901_Q5_V4 (外部リンク) (最終アクセス:2026 年 6 月 25 日) より調査票を確認可能。

(注 5) イギリス国家統計局ウェブサイト <https://www.ons.gov.uk/census/censustransformationprogramme/questiondevelopment/census2021paperquestionnaires> (外部リンク) (最終アクセス:2026 年 6 月 25 日) より調査票を取得可能。

(注 6) 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇(2019)「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート報告書(単純集計結果)」, <https://osaka-chosa.jp/report.html> (外部リンク) (最終アクセス:2026 年 6 月 25 日)

(注 7) SOGI 人口学科研費チームによる調査は、図表内で取り上げている大阪市調査以降、2023 年に全国調査である「家族と性と多様性にかんする全国アンケート」が実施されている。後述するとおり、同調査では 3 設問目における 3 つ目の選択肢を「その他」ではなく、「男性・女性にあてはまらない」としている。

3. 当事者団体等に対するヒアリング調査結果

性別の把握方法について当事者の視点からの意見を収集するため、性的マイノリティ当事者団体 5 団体およびジェンダー統計の専門家へのヒアリングを実施した。実験的アンケート調査の設計にあたって特に示唆のあった 2 つのポイントは次のとおりである。

1 点目は、設問文や選択肢の構成はもとより、「性別」を尋ねられた際に、どの性別を答えればよいのかわからないことが大きな問題であるという点である。提示された設問において性別が定義されていないことや自身の性別を回答できる選択肢が存在しないことなどから、回答ができないという問題である。

2 点目は、「性別は何ですか」と聞かれた場合、どの性別を答えればよいのか判別できないことから、行政や金融機関などからの調査であれば戸籍や住民票上の性別を答えるべきと判断し、医療機関で回答する場合には身体の性別を答えるべきと判断するなど、アンケート調査の実施主体やその目的に応じて回答する性別を調整している様子が見えた点である。こうした場面以外では、基本的には性自認をもとに回答しているとの意見も多く聞かれた。

なお、各ヒアリング協力者に対して、SOGI 人口学科研費チームが用いている 3 ステップ方式に答えられるかどうか、答えやすいかどうかを尋ねたところ、細かな指摘はあったものの、いずれの団体・個人からも批判的な意見は聞かれなかった。ただし、性別の把握方法が工夫され、配慮が凝らされたとしても、やはり性別を尋ねられたくない人もいるという意見も一部にみられた。

4. 実験的アンケート調査に向けたリサーチクエスチョンおよびテストの検討

(1) リサーチクエスチョン

本調査研究におけるアンケート調査で検証するリサーチクエスチョンは図表 3 のとおりである。以下では、留意事項に記載のとおり、アンケート調査への回答結果から性別(出生時性や戸籍性など)と現在の性自認が一致しない、または、トランスジェンダーと認識していると読み取れる回答パターンを示す状態を、「トランスステータスを有する」と表現する。

図表 3 実験的アンケート調査におけるリサーチクエスチョン

RQ1.	出現率への影響
RQ2.	選択肢「その他」とトランスステータスの関係
RQ2-1.	「その他」と回答する人は、トランスステータスを有するか。
RQ2-2.	トランスステータスを有する者は、性別「その他」と回答するか。
RQ3.	性自認におけるマイノリティ当事者にとって、どの把握方法が望ましいか。
RQ3-1.	回答することへの抵抗感の少ない把握方法は何か。
RQ3-2.	配慮のある把握方法は何か。
RQ3-3.	適切に性のあり方を表現できる把握方法は何か。
RQ4.	3 ステップ方式により回収率は下がるか。
RQ5.	3 ステップ方式は受け入れられるか。

(出所) 当社作成。

「RQ1:出現率への影響」は、性別の把握方法の違いによって、トランスステータスを有する者の出現率(回答者全体のなかに当該属性の回答者がどの程度の割合で含まれるか)に違いがあるかどうかを確認するものである。性別の把握方法の違いが、アンケート調査のデータの質にどの程度影響するかを検証することを目的としている。

「RQ2:選択肢『その他』とトランスステータスの関係」は、選択肢「その他」によってトランスステータスの有無を

捕捉できるのかを検証するものである。当事者団体等へのヒアリングにおいては、「その他」という文言が好ましくないことや、自身は「その他」とは回答しないものの、ないよりはましだという意見もあった。選択肢「その他」を設ける例がみられるようになったことを踏まえ、「その他」という選択肢によって性的マイノリティ当事者（特にトランスステータスを有する回答者）をどの程度捕捉できるか、その実用性を検証することを目的としている。

「RQ3:性自認におけるマイノリティ当事者にとって、どの把握方法が望ましいか」は、抵抗感の有無、配慮の程度、自身の性のあり方を適切に表現できるかどうかという点から、各把握方法の評価を得るものである。

「RQ4:3 ステップ方式により回収率は下がるか」および「RQ5:ステップ方式は受け入れられるか」は、SOGI 人口学科研費チームにおいて 3 ステップ方式に関する研究が進んでいること、性的マイノリティ当事者団体等へのヒアリングにおいて 3 ステップ方式に対する大きな課題が指摘されなかったことから、3 ステップ方式が広まる余地を検証するものである。3 ステップ方式は、その名称のとおり 3 設問が用いられることになり、回答者にとって回答すべき設問が増えることが懸念される。RQ4 では、3 ステップ方式によって性別を把握することで回収可能性が減りうるかどうかを検証する。RQ5 については、前述のイギリスにおける検証と同様に、社会的受容性を検証するものである。

(2) テスト対象とする性別の把握方法

上述のリサーチクエスチョンを踏まえ、実験的アンケート調査において検証するテスト項目を設定した。まず、テスト対象となる性別の把握方法は図表 4 に示すア～オの 5 つとした。

図表 4 テスト対象とした 5 つの性別の把握方法

ア:「その他」なし 1 ステップ方式

Q 1. あなたの性別をお選びください。
1. 男性
2. 女性

イ:「その他」あり 1 ステップ方式

Q 1. あなたの性別をお選びください。
1. 男性
2. 女性
3. その他

ウ: 戸籍性

Q 1. あなたの現在の戸籍上の性別をお選びください。
1. 男性
2. 女性

エ: 2 ステップ方式

Q 1. あなたの現在の戸籍上の性別をお選びください。
1. 男性
2. 女性

Q 2. あなたの今の認識にもっとも近い性別はどれですか。
1. 男性
2. 女性
3. 男性・女性にあてはまらない

オ: 3 ステップ方式

Q 1. あなたの現在の戸籍上の性別をお選びください。
1. 男性
2. 女性

Q 2. あなたは今のご自分の性別を、出生時の性別と同じだと考えていますか。（いくつでも）
1. 出生時の性別と同じ
2. 別の性別だと考えている
3. 違和感がある

※前問で「別の性別だと考えている」「違和感がある」と回答した方にお伺いします。
Q 3. あなたの今の認識にもっとも近い性別はどれですか。
1. 男性
2. 女性
3. 男性・女性にあてはまらない

(出所) 当社作成。

「ア:『その他』なし 1 ステップ方式」は、性のあり方について特段の配慮を行っていない、もっとも一般的にみられる男女の別を問う設問である。設問文において「性別」という文言を用いるが、その定義が示されていないことも多くみられる形式といえる。「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」は設問文はアと同じであるが、性的マイノリティへの配慮に対する社会的な認知の高まりとともにみられるようになった選択肢「その他」を設ける設問である。「ウ:戸籍性」は性別を戸籍上の性別と定義したうえで尋ねる方法である。戸籍上の性別を把握するものであるため、選択肢は「男性」「女性」のみである。「エ:2 ステップ方式」はカナダでみられる 2 ステップ方式、「オ:3 ステップ方式」は SOGI 人口学科研費チームが用いている 3 ステップ方式である。

なお、選択肢「その他」については、当事者団体等へのヒアリングにおいて、「男性」「女性」のいずれにもあてはまらない場合の選択肢として「その他」という文言は排他的な印象を与えることから適切ではないという指摘があった。SOGI 人口学科研費チームとの意見交換を踏まえ、「エ:2 ステップ方式」および「オ:3 ステップ方式」においては、認識している性別の選択肢として「その他」ではなく「男性・女性にあてはまらない」とすることとした。一方、イについては、選択肢「その他」に関する検証を行うため、文言は「その他」のままとした。

(3) テスト項目(主要な調査項目)

リサーチクエスションに対する解答を導くことを目的として、検証するテスト項目を図表 5(p.10)のとおり検討した。

RQ3 については、テスト対象とした 5 つの性別の把握方法のうち、ア～ウについては、それぞれの把握方法についての回答しやすさ(迷うことなく回答できるかどうか)と抵抗感の有無に加え、回答の基準(性別を問われたときに何を基準に回答しているか)も検証した(テスト 1～8)。また、ア～オについて、回答のしやすさ(迷うことなく回答できるかどうか)、配慮があるかどうか、性のあり方を正確に答えられるかの 3 点を比較した(テスト 9～14 およびテスト 18～26)。

これらの把握方法間の比較に加えて、3 ステップ方式については、2 ステップ目および 3 ステップ目の個別の設問に対する評価も把握した(テスト 15～17)。

RQ4 および RQ5 に対応するテスト項目はテスト 27～28 である。

このほかに、RQ1 および RQ2 に関連するデータの取得を目的にテスト 29 を設けた。

図表 5 実験的アンケート調査で検証したテスト項目

No	テスト対象	テスト内容
RQ3. 性自認におけるマイノリティ当事者にとって、どの把握方法が望ましいか。		
1	ア:「その他」なし 1 ステップ方式	回答の基準
2	ア:「その他」なし 1 ステップ方式	回答しやすさ(迷うことなく回答できるか)
3	ア:「その他」なし 1 ステップ方式	回答することへの抵抗感
4	イ:「その他」あり 1 ステップ方式	回答の基準
5	イ:「その他」あり 1 ステップ方式	回答しやすさ(迷うことなく回答できるか)
6	イ:「その他」あり 1 ステップ方式	回答することへの抵抗感
7	ウ:戸籍性	回答しやすさ(迷うことなく回答できるか)
8	ウ:戸籍性	回答することへの抵抗感
9	ア:「その他」なし 1 ステップ方式 と ウ:戸籍性の比較	どちらが回答しやすいか
10	ア:「その他」なし 1 ステップ方式 と ウ:戸籍性の比較	どちらが配慮があると感じるか
11	ア:「その他」なし 1 ステップ方式 と ウ:戸籍性の比較	どちらが性のあり方を正確に答えられるか
12	イ:性別のみ・定義なし・男女+その他 と ウ:戸籍性の比較	どちらが回答しやすいか
13	イ:性別のみ・定義なし・男女+その他 と ウ:戸籍性の比較	どちらが配慮があると感じるか
14	イ:性別のみ・定義なし・男女+その他 と ウ:戸籍性の比較	どちらが性のあり方を正確に答えられるか
15	オ:3 ステップ方式の 2 ステップ目	回答しやすさ(迷うことなく回答できるか)
16	オ:3 ステップ方式の 3 ステップ目(認識している性別の把握)	回答しやすさ(迷うことなく回答できるか)
17	オ:3 ステップ方式の 3 ステップ目(認識している性別の把握)	抵抗感
18	イ:「その他」あり 1 ステップ方式 と エ:2 ステップ方式 の比較	どちらが回答しやすいか
19	イ:「その他」あり 1 ステップ方式 と エ:2 ステップ方式 の比較	どちらが配慮があると感じるか
20	イ:「その他」あり 1 ステップ方式 と エ:2 ステップ方式 の比較	どちらが性のあり方を正確に答えられるか
21	イ:「その他」あり 1 ステップ方式 と オ:3 ステップ方式 の比較	どちらが回答しやすいか
22	イ:「その他」あり 1 ステップ方式 と オ:3 ステップ方式 の比較	どちらが配慮があると感じるか
23	イ:「その他」あり 1 ステップ方式 と オ:3 ステップ方式 の比較	どちらが性のあり方を正確に答えられるか
24	エ:2 ステップ方式 と オ:3 ステップ方式 の比較	どちらが回答しやすいか
25	エ:2 ステップ方式 と オ:3 ステップ方式 の比較	どちらが配慮があると感じるか
26	エ:2 ステップ方式 と オ:3 ステップ方式 の比較	どちらが性のあり方を正確に答えられるか
RQ4. 3 ステップ方式により回収率は下がるか。		
27	オ:3 ステップ方式全体	調査への回答を止めてしまう可能性が高まるか
RQ5. 3 ステップ方式は受け入れられるか。		
28	オ:3 ステップ方式全体	3 ステップ方式が広まるとよいか／広まってもよいか
RQ1. 出現率への影響 および RQ2. 選択肢「その他」とトランスステータスの関係		
29	選択肢「その他」とトランスステータスの関係を補足するデータの取得	異なる把握方法へどのように回答するか

(出所) 当社作成。

5. 実験的アンケート調査の具体的な設計

(1) サンプルング(アンケート調査の対象者およびスクリーニング調査の設計)

トランスステータスを有する回答者に本アンケートに回答してもらうことおよび「RQ1.出現率への影響」を検証することの 2 つの目的から、調査の対象者やスクリーニング調査の設計を検討した。実験的アンケート調査の調査対象の概要を図表 6 に示す。

まず、調査会社が有するモニターを、登録上の性別、年齢、居住地(全国を対象)の分布ができるだけ均等になるようにしつつ、A 群、B 群、C 群に 3 分割した。そのうえで、これら 3 群に対し、それぞれ異なる性別の把握方法を用いたスクリーニング調査を配信し、回答を得たうえで、一定数の性的マイノリティ当事者と性的マイノリティ非当事者が本調査へ進むよう設定した。

A 群は定義のない状態で性別を尋ね、選択肢に「その他」を設けた設問(「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」)に

てスクリーニング調査を実施した。B 群は「エ:2 ステップ方式」、C 群は「オ:3 ステップ方式」により、それぞれスクリーニング調査を実施した¹⁴。性自認におけるトランスステータスの有無の判定基準として、A 群は「その他」と回答した者、B 群は出生性と現在認識している性別の回答内容が一致しない者、C 群は 2 ステップ目において「別の性別ととらえている」または「違和感がある」と回答した者をトランスステータスを有する回答者と判定した¹⁵。

さらに、「RQ2.選択肢『その他』とトランスステータスの関係」について検証するため、3 ステップ方式とは異なる方法でスクリーニング調査を実施した A 群および B 群の回答者に対して、3 ステップ方式を用いて性別を問われた場合にどのように回答するかを把握した。反対に、3 ステップ方式によるスクリーニング調査を行った C 群の回答者に対して、「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」にどのように回答するかを把握した(テスト 29)。

図表 6 実験的アンケート調査の調査対象・配信方法

	A 群	B 群	C 群
性別・性自認の把握	イ:「その他」あり 1 ステップ方式	エ:2 ステップ方式	オ:3 ステップ方式
性的指向の把握方法	大阪市民調査の設問・選択肢に準拠		
配信方法	調査会社が保有するモニターを、登録時の性別・年齢・居住地の分布が均等になるよう 3 分割のうえ配信		

(出所) 当社作成。

(2) 調査画面構築上の工夫

[1] インターネット調査における 3 ステップ方式の実装方法

当事者団体等へのヒアリングにおいて、3 ステップ方式の 3 問がそれぞれ別々の画面に表示される仕組み(例えば、戸籍性を回答のうえ画面上の「次へ」をクリックすると、2 ステップ目の設問の画面に遷移するなど)の場合、1 問目を回答する際に、アンケート調査全体を通じて戸籍上の性別のみが把握されているように見え、回答を辞退する可能性があるとの指摘があった。そこで、調査の回答フォームの構築にあたっては、3 ステップ方式の 1 設問目、2 設問目および 3 設問目が同一画面上に表示されるようにした(図表 7)。

3 ステップ方式の 3 設問目(今の認識にもっとも近い性別)については、ロジック制御上は本来、2 設問目において「出生時の性別と同じ」と回答した場合には回答対象外(非該当)となる。しかし、同一回答画面上で 2 設問目から 3 設問目へのロジック制御を行うことができないため、3 つの設問を同一画面上に表示しつつ、3 設問目を任意回答とした。

¹⁴ なお、本レポートには、その分析結果を含められていないが、性自認のほかに、SOGI 人口学科研費チームが実施した「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」(以下、「大阪市民調査」)¹⁴における性的指向の設問を設け、性的指向が異性愛者ではない者も本調査へ進むように制御した。

¹⁵ なお、「家族と性と多様性にかんする全国アンケート」(研究代表者 厚生労働省 国立社会保障・人口動向研究部第 2 室長 釜野さおり)では、3 ステップ方式において、2 設問目において「別の性別ととらえている」または「違和感がある」と回答した場合であっても、1 設問目(戸籍性)と 3 設問目(認識している性別)が一致した回答者を当事者とは判定しない運用をしている。¹⁶ 本調査結果を用いた選択肢「その他」に関する分析は、平森大規(2024)「性別を「その他」と回答する人はみな性的マイノリティなのか?—ジェンダー統計の精緻化に向けたクィア人口学的分析—」『国際ジェンダー学会誌』22, 52-65.も参照されたい。

図表 7 インターネット調査における 3 ステップ方式の実装イメージ

Q1C_1
あなたの現在の戸籍上の性別をお選びください。

1 ☐ 男性
2 ☐ 女性

Q1C_2
あなたは今のご自分の性別を、出生時の性別と同じだと考えていますか。
(いくつでも)

1 ☐ 出生時の性別と同じ
2 ☐ 別の性別だと考えている
3 ☐ 違和感がある

Q1C_3
前問で「別の性別だと考えている」「違和感がある」と回答した方にお伺いします。
あなたの今の認識にもっとも近い性別はどれですか。
※ご回答は任意です。
※前問で「出生時性別と同じ」と回答された方は、本設問はご回答いただく必要はございません。

1 ☐ 男性
2 ☐ 女性
3 ☐ 男性・女性にあてはまらない

次へ

- 1画面に3問全てを表示。
- 必須回答
- 必須回答
● 選択肢1は排他
- Q1C_2で2または3を選択した場合のみ回答可
● 任意回答(無回答可)

(出所) 当社作成。

[2] テスト項目の実装方法

各テスト項目を検証する設問については、「このページでは以下の性別の聞き方についてお答えください。」
「このページでは以下の A と B の聞き方を比べてお答えください。」などと案内したうえで、評価対象や比較対象となる把握方法を図示し、各テスト項目に対応する設問を設けた(図表 8)。

図表 8 実験的アンケート調査におけるテスト項目の実装方法

このページでは以下の性別の聞き方についてお答えください。

Q 1.あなたの性別をお選びください。
1.男性
2.女性
3.その他

Q8
このように聞かれた際、迷うことなく回答することができますか。

1 ☐ そう思う
2 ☐ ややそう思う
3 ☐ どちらともいえない
4 ☐ あまりそう思わない
5 ☐ そう思わない

Q9
このように聞かれることに抵抗がありますか。

1 ☐ 抵抗がある
2 ☐ やや抵抗がある
3 ☐ どちらともいえない
4 ☐ 抵抗はあまりない
5 ☐ 抵抗はない

このページでは以下の A と B の聞き方を比べてお答えください。

【A】

Q 1.あなたの性別をお選びください。
1.男性
2.女性
3.その他

【B】

Q 1.あなたの現在の戸籍上の性別をお選びください。
1.男性
2.女性

Q 2.あなたは今のご自分の性別を、出生時の性別と同じだと考えていますか。(いくつでも)
1.出生時の性別と同じ
2.別の性別だと考えている
3.違和感がある

※前問で「別の性別だと考えている」「違和感がある」と回答した方にお伺いします。
Q 3.あなたの今の認識にもっとも近い性別はどれですか。
1.男性
2.女性
3.男性・女性にあてはまらない

(出所) 当社作成。

ご利用に際してのご留意事項を最後に記載していますので、ご参照ください。
(お問い合わせ)コーポレート・コミュニケーション室 E-mail: info@murc.jp

12 / 24

6. 回答状況

有効回答数は下表のとおりである。

図表 9 実験的アンケート調査の有効回答数

	A 群	B 群	C 群
スクリーニング調査 有効回答数	17,058	17,091	15,449
本調査 有効回答数	2,528	2,659	2,726

(出所) 当社作成。

7. 実験的アンケート調査の主な結果

(1) 【RQ1】出現率への影響

A 群～C 群のスクリーニング調査において、トランスステータスを有する回答者の出現率をみると、A 群では 0.4% (「その他」と回答した者の割合) (図表 10)、B 群では 0.9% (2 ステップ方式で性別と認識している性別の回答内容が一致しない者の割合) (図表 11)、C 群は 1.5% (3 ステップ方式の 2 設問目で「別の性別ととらえている」または「違和感がある」と回答した者の割合) (図表 12) であった。回答者全体に占める割合で見れば僅かな差ではあるものの、3 ステップ方式におけるトランスステータスを有する人の出現率をもっとも高い結果となった。

図表 10 A 群のスクリーニング調査結果 (「イ:「その他」あり 1 ステップ方式」によるスクリーニング): 単数回答

Q1A.性別	n	%
男性	9,883	57.9
女性	7,114	41.7
その他	61	0.4
全体	17,058	100.0

(出所) 当社作成。

(注) 表内 n は該当者数、% は集計対象全体に対する割合を示す。以降同様。

図表 11 B 群のスクリーニング調査結果 (「エ:2 ステップ方式」によるスクリーニング): 単数回答

Q1B 1.性別	Q1B 2.性自認	n	%	
男性	男性	9,115	53.3	99.1
女性	女性	7,814	45.7	
男性	女性	35	0.2	0.9
男性	男性・女性にあてはまらない	28	0.2	
女性	男性	34	0.2	
女性	男性・女性にあてはまらない	65	0.4	
	全体	17,091	100.0	100.0

(出所) 当社作成。

図表 12 C 群のスクリーニング調査結果(「オ:3 ステップ方式」によるスクリーニング):単数回答

Q1C 1.性別	Q1C 2.2ステップ目	Q1C 3.性自認	n	%	
男性	出生時の性別と同じ	-	8,124	52.6	98.5
女性	出生時の性別と同じ	-	7,088	45.9	
男性	別の性別だととらえているor違和感がある	男性	44	0.3	
男性	別の性別だととらえているor違和感がある	女性	20	0.1	
男性	別の性別だととらえているor違和感がある	男性・女性にあてはまらない	26	0.2	
男性	別の性別だととらえているor違和感がある	無回答	0	0.0	
女性	別の性別だととらえているor違和感がある	男性	16	0.1	
女性	別の性別だととらえているor違和感がある	女性	62	0.4	
女性	別の性別だととらえているor違和感がある	男性・女性にあてはまらない	65	0.4	
女性	別の性別だととらえているor違和感がある	無回答	4	0.0	
全体			15,449	100.0	100.0

(出所) 当社作成。

(2) 【RQ2】選択肢「その他」とトランスステータスの関係

[1] 選択肢「その他」を選択する人は、トランスステータスを有するか

選択肢「その他」とトランスステータスの関係をみるため、A 群のスクリーニング調査において「その他」と回答した者が、3 ステップ方式に対してどのように回答するかを確認した。結果をみると、スクリーニング調査で「その他」と回答した者のうち、3 ステップ方式でもトランスステータスが有ると判定される回答者は 41.0%にとどまった(図表 13)。一方、「その他」と回答した者のうち、51.3%は出生性が「女性」かつ現在認識している性別が出生時と同じ女性である者であり、トランスステータスを有する回答者の 41.0%を上回っている(同図表 13)。選択肢「その他」を選択する回答者がトランスステータスを有する割合は 5 割未満である可能性が示唆されたといえる。

図表 13 「イ:「その他」あり 1 ステップ方式」で「その他」と回答した者の「オ:3 ステップ方式」への回答内容
:単数回答

		合計	Q33AB.3ステップ方式		
			男性(出生時の性別と同じ)	女性(出生時の性別と同じ)	当事者性有(別の性別だととらえているor違和感がある)
A群	全体	2,528	47.2	47.8	5.0
	男性	1,237	95.6	0.4	4.0
	女性	1,252	0.6	94.6	4.8
	その他	39	7.7	51.3	41.0

(出所) 当社作成。

[2] トランスステータスを有する者は選択肢「その他」を選択するか

反対に、3 ステップ方式においてトランスステータスを有すると判定された回答者が、「男性」「女性」「その他」を選択肢とする 1 ステップ方式の設問にどのように回答するかをみると、「その他」と回答する割合は 23.6%にとどまった(図表 14)。7 割以上が「男性」または「女性」と回答したことから、選択肢「その他」を回答する者がトランスステータスを有するとは限らない可能性がうかがえる。

図表 14 「オ:3 ステップ方式」でトランスステータス有の「イ:「その他」あり 1 ステップ方式」への回答内容:単数回答

		合計	Q33C.1ステップ方式		
			男性	女性	その他
全体		2,730	43.8	54.2	2.0
C群	男性(出生時の性別と同じ)	1,151	99.3	0.5	0.2
	女性(出生時の性別と同じ)	1,397	0.5	98.8	0.7
	トランスステータス有(別の性別だととらえているor違和感がある)	182	25.3	51.1	23.6

(出所) 当社作成。

[3] 選択肢「その他」を回答する者の傾向

A 群において選択肢「その他」と回答した者のうち、3 ステップ方式においてもトランスステータスを有する回答者と判定された者について、3 設問目(今の認識にもっとも近い性別)の回答内容をみると、81.3%が「男性・女性にあてはまらない」と回答している(図表 15)。反対に、C 群について、3 ステップ方式の回答内容別に 1 ステップ方式(「男性」「女性」「その他」)への回答内容をみると、3 ステップ方式の 3 設問目(今の認識にもっとも近い性別)で「男性・女性にあてはまらない」と回答した者において、1 ステップ方式の設問で「その他」と回答する割合が高くなっている(図表 16)。

図表 15 A 群で「その他」と回答した者の、3 ステップ方式の 3 設問目への回答内容:単数回答

		合計	Q33AB_3.【A群B群に対して3ステップ方式で把握】前問で「別の性別だととらえている」「違和感がある」と回答した方にお伺いします。あなたの今の認識にもっとも近い性別はどれですか。			
			男性	女性	男性・女性にあてはまらない	不明
全体		126	22.2	21.4	51.6	4.8
A群	男性	50	48.0	12.0	40.0	0.0
	女性	60	5.0	33.3	53.3	8.3
	その他	16	6.3	6.3	81.3	6.3

(出所) 当社作成。

図表 16 3 ステップ方式への回答内容別、1 ステップ方式(「男性」「女性」「その他」)への回答内容:単数回答

		合計	Q33C.【C群に対して1ステップ方式で把握】あなたの性別をお選びください。			
			男性	女性	その他	不明
全体		2,730	43.8	54.2	2.0	0.0
C群	男性・トランスステータス無	1,151	99.3	0.5	0.2	0.0
	女性・トランスステータス無	1,397	0.5	98.8	0.7	0.0
	男性・トランスステータス有-男性	29	89.7	0.0	10.3	0.0
	男性・トランスステータス有-女性	17	64.7	17.6	17.6	0.0
	男性・トランスステータス有-男性・女性にあてはまらない	19	42.1	15.8	42.1	0.0
	男性・トランスステータス有-不明	0	0.0	0.0	0.0	0.0
	女性・トランスステータス有-男性	14	7.1	64.3	28.6	0.0
	女性・トランスステータス有-女性	40	0.0	90.0	10.0	0.0
	女性・トランスステータス有-男性・女性にあてはまらない	59	0.0	64.4	35.6	0.0
	女性・トランスステータス有-不明	4	0.0	100.0	0.0	0.0

(出所) 当社作成。

いずれの結果もサンプルサイズが小さいことに留意が必要であるが、選択肢「その他」はトランスステータスを有する回答者のなかでも特に「男性・女性にあてはまらない」という回答者に選ばれやすい、または、「男性・女性にあてはまらない」と回答する者はトランスステータスを有するほかの者よりも「その他」を選択する可能性が高い傾向がうかがえる。

(3) 回答する性別の定義

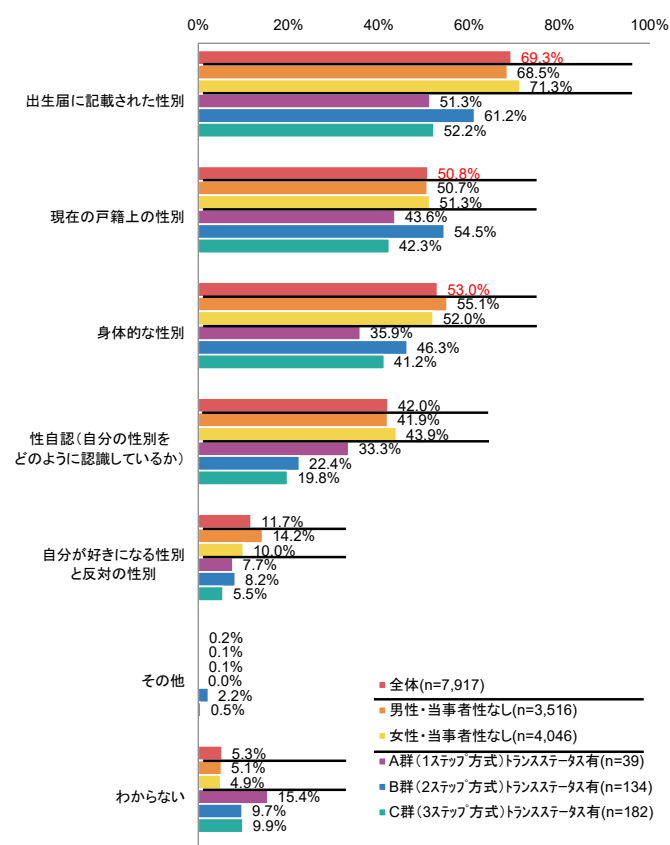
「ア:『その他』なし 1 ステップ方式」および「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」の方法で、性別を尋ねられたとき、性別をどのように定義のうえ回答するのかを把握した(それぞれ、図表 17、図表 18)。

まず、当事者性のない男性および当事者性のない女性(以下、当事者性のない者をシスジェンダーと表記する。)についてみると、アおよびイの両方において、「出生届に記載された性別」が 7 割、「現在の戸籍上の性別」「身体的な性別」が 5 割となっており、シスジェンダーの回答者であっても、性別を回答する際の定義は一樣ではないことがうかがえる。

次に、トランスステータスを有する回答者についてみると、A 群～C 群のいずれの回答群についても、アおよびイの両方について、「出生届に記載された性別」や「身体的な性別」と回答した割合がシスジェンダーよりも低い傾向がみられる。

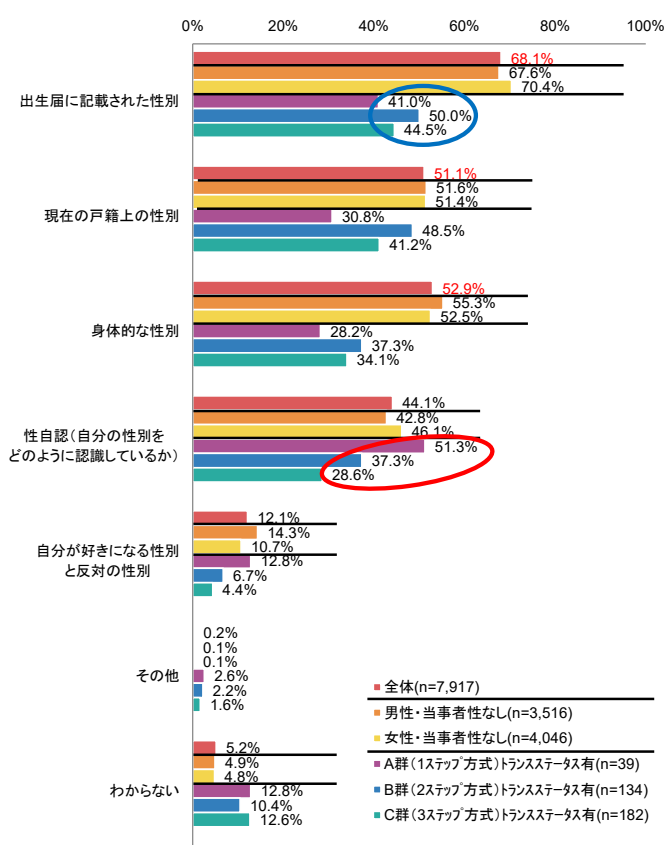
図表 17 「ア:『その他』なし 1 ステップ方式」の方法で
性別を尋ねられた際の回答者が回答する性別の内容

:複数回答



図表 18 「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」の方法で
性別を尋ねられた際の回答者が回答する性別の内容

:複数回答



(出所) 当社作成。

また、トランスステータスを有する回答者について、アおよびイに対する回答の違いをみると、例えば C 群におけるトランスステータスを有する回答者では、アに比べてイにおいて「出生届に記載された性別」の割合が低く、「性自認(自分の性をどのように認識しているか)」の割合が高くなっている。アとイの違いは選択肢「その他」の有無のみであるが、選択肢に「その他」が設けられることで、性自認(自分の性別をどのように認識しているか)を問われていると認識しやすくなることが示唆される。

なお、「性自認(自分の性をどのように認識しているか)」の回答割合は、シスジェンダーのほうが高くなっているが、これは設問が複数回答式であったこと、および「性自認(自分の性をどのように認識しているか)」という文言の解釈の差によるものと考えられ、単純な比較には留意が必要である。シスジェンダーに対して認識している性別は何かと尋ねれば、多くの場合、「男性」か「女性」かのいずれかのみが想起され、認識している性別が出生届に記載された性別などと一致するため、「性自認(自分の性をどのように認識しているか)」にも回答が寄せられた可能性がある。一方、トランスステータスを有する回答者からすれば、「性自認(自分の性をどのように認識しているか)」という選択肢について、「出生届に記載された性別」や「現在の戸籍上の性別」とは必ずしも一致しない自己が認識する性別が存在することが念頭に置かれることから、「出生届に記載された性別」や「現在の戸籍上の性別」と同時回答される割合がシスジェンダーよりも低く現れたと考えられる。

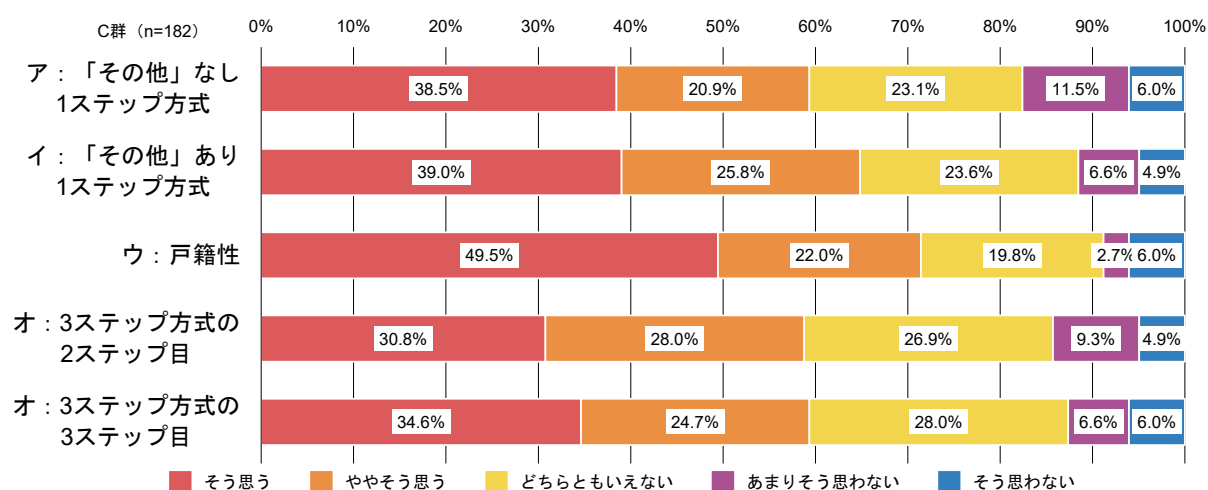
(4) 【RQ3】把握方法の評価比較

以下では、C 群(3 ステップ方式でスクリーニング)においてトランスステータスを有すると判定された回答者を対象として、各種の性別の把握方法に対する評価をみていく。

[1] 回答のしやすさ(迷うことなく回答できるか)

回答のしやすさ(迷うことなく回答できるか)に対する評価をみると(図表 19)、回答がしやすいと評価されたのは「ウ:戸籍性」であり、「そう思う」が 49.5%、「ややそう思う」が 22.0%で、合わせて 71.5%が回答しやすいと回答した(テスト 7)。「オ:3 ステップ方式の 2 設問目」(テスト 15)および「オ:3 ステップ方式の 3 設問目」(テスト 16)については、回答がしやすいという割合は「ア:『その他』なし 1 ステップ方式」(テスト 2)と同程度であった。

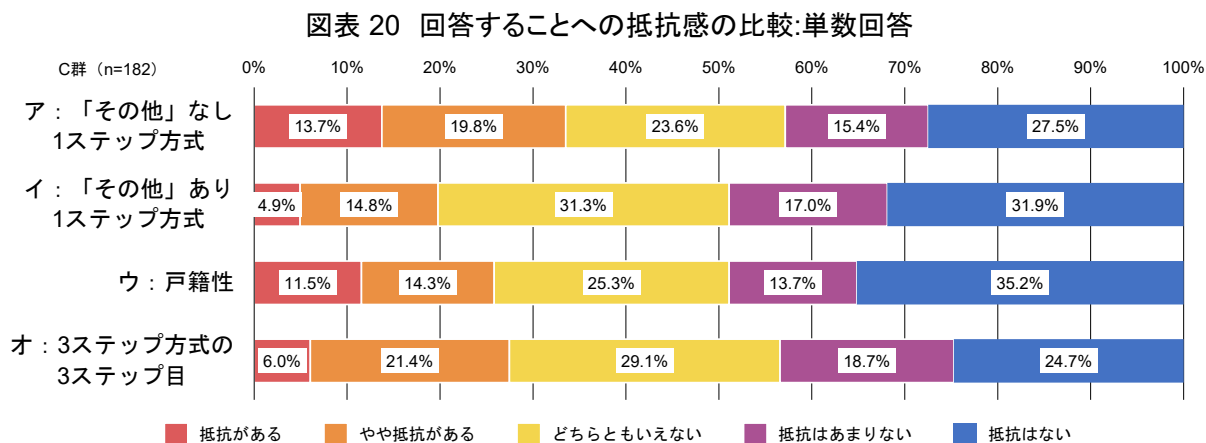
図表 19 回答のしやすさ(迷うことなく回答できるか)の比較:単数回答



(出所) 当社作成。

[2] 【RQ3-1】回答することへの抵抗感

回答することへの抵抗感に関する評価をみると(図表 20)、抵抗感が強いのは「ア:『その他』なし 1 ステップ方式」であり、「抵抗がある」が 13.7%、「やや抵抗がある」が 19.8%で、合わせて 33.5%が抵抗があると回答した。一方、抵抗感が小さいのは「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」で、「抵抗がある」が 4.9%、「やや抵抗がある」が 14.8%で、合わせて 19.8%が抵抗があると回答した。

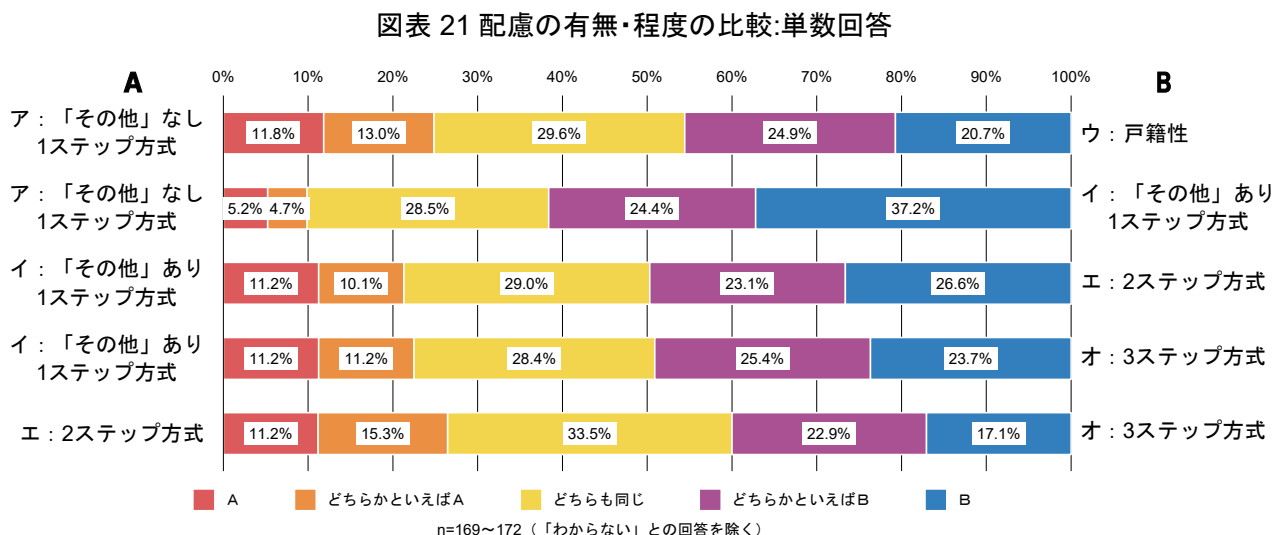


(出所) 当社作成。

[3] 【RQ3-2】配慮の有無・程度

2 つの性別の把握方法を比較して、どちらが配慮があると思うかを把握した(図表 21)。結果をみると、まず、「ア:『その他』なし 1 ステップ方式」と「ウ: 戸籍性」の比較では、ウのほうが配慮があるという傾向であった(テスト 10)。また、アと「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」を比べると、イのほうが配慮があるという割合が 6 割を超えており、単に定義なく性別を尋ねる場合、「その他」があるほうが配慮があるという傾向がみられた(テスト 13)。

一方、イと「エ: 2 ステップ方式」「オ: 3 ステップ方式」を比べると、イよりもエ(テスト 19)、イよりもオ(テスト 22)のほうが配慮があるという割合が 5 割近くとなっており、「その他」を設けた 1 ステップ方式よりも、2 ステップ方式や 3 ステップ方式のほうが配慮があるという傾向がみられた。さらに、エとオを比較すると、オのほうが配慮がある、つまり、2 ステップ方式よりも 3 ステップ方式のほうが配慮があるという割合が高い傾向がみられた(テスト 25)。



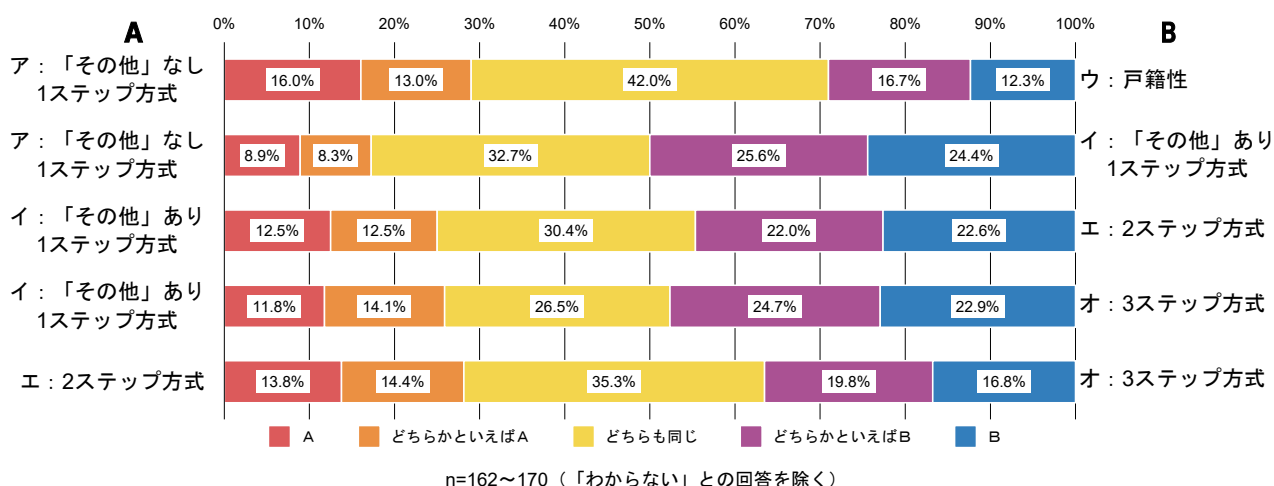
(出所) 当社作成。

[4] 【RQ3-3】性のあり方を適切に表現できるか

2つの性別の把握方法を比較して、どちらが適切に性のあり方を表現できるかという把握した(図表 22)。結果をみると、まず、「ア:『その他』なし 1 ステップ方式」と「ウ:戸籍性」の比較ではあまり差がみられなかった(テスト 11)。アと「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」を比べると、イのほうが適切に性のあり方を表現できるという割合が 5 割となっており、定義なく性別を把握する場合、「その他」があるほうが適切に性のあり方を表現できるという割合が高い傾向がみられた(テスト 14)。

一方、イと「エ:2 ステップ方式」「オ:3 ステップ方式」を比べると、イよりもエ(テスト 20)、イよりもオのほうが適切に性のあり方を表現できるという割合が 5 割近くとなっており(テスト 23)、「その他」を設けた 1 ステップ方式よりも、2 ステップ方式や 3 ステップ方式で把握するほうが、適切に性のあり方を表現できるという割合が高い傾向がみられた。さらに、エとオを比較すると、オのほうが適切に性のあり方を表現できる、つまり、2 ステップ方式よりも 3 ステップ方式のほうが適切に性のあり方を表現できるという割合がやや高い傾向がみられた(テスト 26)。

図表 22 適切に性のあり方を表現できるかの比較:単数回答



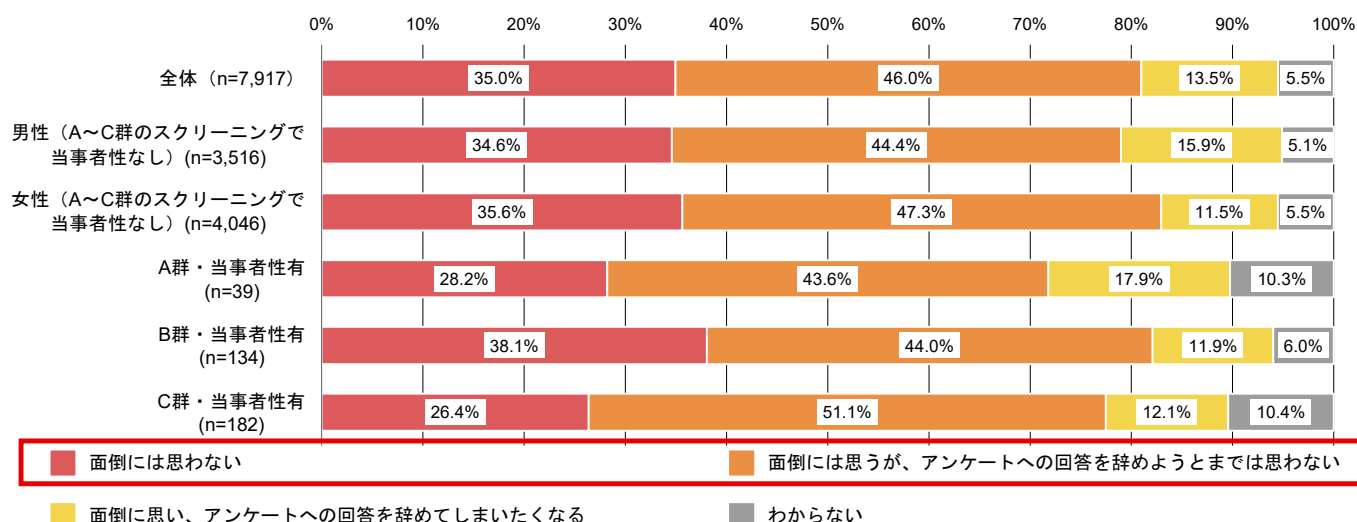
(出所) 当社作成。

(5) 【RQ4】3 ステップ方式の回答負担

3 ステップ方式の回答負担についてみると(図表 23)、A~C 群の回答者全体(n=7,917;性的マイノリティ当事者含む)では、3 ステップ方式への回答が「面倒には思わない」が 35.0%、「面倒には思うが、アンケートへの回答を辞めようとまでは思わない」が 46.0%となっており、合わせて 81.0%が 3 ステップ方式でもアンケートの回答を完了する意向を示している。トランスステータスのない回答者においても、8 割程度が回答する意向を示している。

なお、トランスステータスを有する回答者層において、「面倒に思い、アンケートへの回答を辞めてしまいたくなる」の割合は、A 群(「その他」と回答した回答者)においてやや高く、B 群(2 ステップ方式)や C 群(3 ステップ方式)におけるトランスステータスを有する回答者とは質的な違いがある可能性がうかがえる。

図表 23 3ステップ方式の回答負担:単数回答



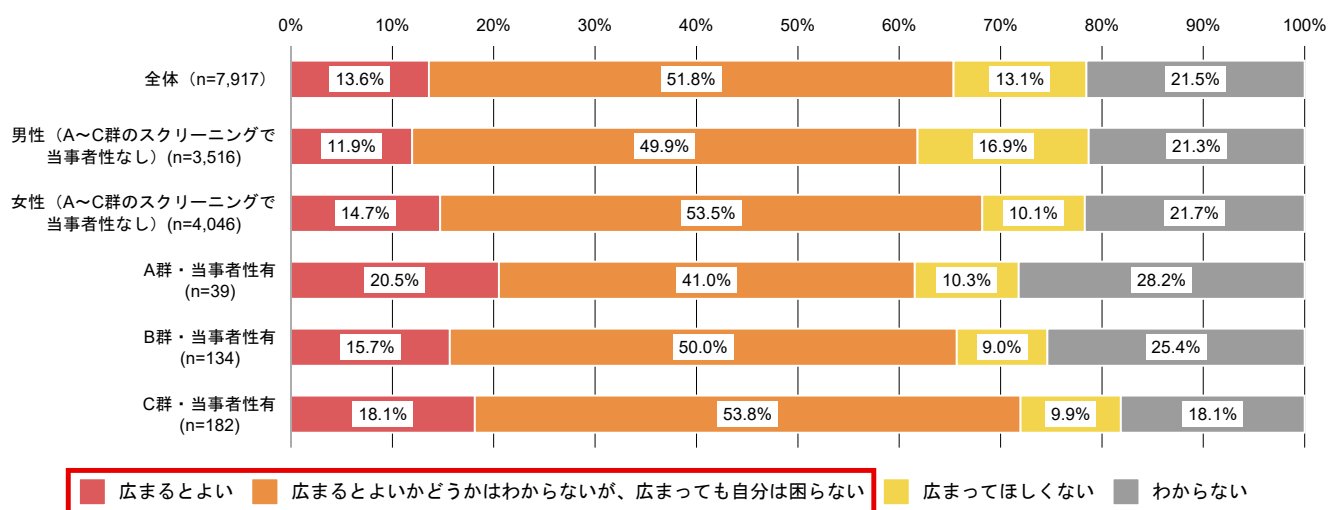
(出所) 当社作成。

(6) 【RQ5】3ステップ方式が広まるとよいか

3ステップ方式が広まるとよいかどうかを把握したところ(図表 24)、A~C 群の回答者全体 (n=7,917; 性的マイノリティ当事者含む) では、「広まるとよい」が 13.6%、「広まるとよいかどうかはわからないが、広まっても自分は困らない」が 51.8%で、合わせて 65.4%が肯定的な回答をした。「広まってほしくない」という否定的な回答は 13.1%、「わからない」が 21.5%であった。

トランスステータスを有する回答者層をみると、A 群(「その他」と回答した者)や B 群(2 ステップ方式)では「わからない」の割合が比較的高かった。一方で、スクリーニング調査において実際に 3 ステップ方式に触れている C 群の回答者では肯定的な回答の割合が高く、合わせて 72.0%が肯定的な回答を示した。

図表 24 3ステップ方式が広まるとよいか:単数回答



(出所) 当社作成。

8. 得られた主な知見と今後に向けた論点整理

(1) 【RQ1】性自認におけるマイノリティを的確に捉える方法はどれか

「イ:『その他』あり 1 ステップ方式」「エ:2 ステップ方式」「オ:3 ステップ方式」を比較した際、「オ:3 ステップ方式」、つまり 3 ステップ方式においてトランスステータスを有する人の出現率がもっとも高い結果であった。また、3 ステップ方式は、ほかの方法に比べて適切に性のあり方を表現できる方法であると評価する人の割合が高い傾向もみられた。こうしたことから、3 ステップ方式がトランスステータスを有することの判断にもっとも適している可能性が示唆される。

(2) 【RQ2】選択肢「その他」の是非¹⁶

「その他」という選択肢を設けることの是非については、総論としては「ないよりはあったほうがよいものの、ベストな方法ではない」ことが示唆された。

「その他」を設ける利点としては、性別を定義することなく性別を尋ねる際に、「その他」がない場合よりも、配慮があり、適切に性を表現できると受け取る人の割合が高い可能性が挙げられる。選択肢に「その他」を設けることで、アンケートの作成者が性自認の存在を意識していると多少なりとも受け取ってもらえる可能性がある。

一方で、実験的アンケート調査からは、「その他」と回答する人が性自認におけるマイノリティ当事者であるとは限らず、また、性自認におけるマイノリティ当事者が「その他」と回答するとは限らないという結果が得られた。性自認におけるマイノリティ当事者は「その他」を選ぶのではないかというアンケート作成者の目論見は、意図したとおりに機能していない可能性が示唆された。さらに、「その他」を設けるよりも、2 ステップ方式や 3 ステップ方式で把握するほうが、配慮があり、適切に性を表現できる人の割合が高いという傾向がみられ、配慮という点において「その他」という選択肢を用いて 1 設問で把握することは最適解ではないことが示唆された。

なお、性別を 1 つの設問で把握し、「男性」「女性」のほかに、性的マイノリティへの配慮からもう 1 つの選択肢を設けることをするのであれば、「その他」ではなく、「男性・女性にあてはまらない」などの文言が好ましいと考えられる。ただし、具体的な文言の検討の前に、把握する性別の具体的な定義を行うことおよびその定義を調査で用いることの趣旨を検討することも重要といえる。

(3) 【RQ3】性自認におけるマイノリティ当事者にとって望ましい把握方法はどれか

回答することへの抵抗感、配慮、性のあり方を適切に表現できるかという 3 つの観点において、3 ステップ方式は他の把握方法よりも評価が高い結果であった。性的マイノリティ当事者団体へのヒアリング調査では、性別に関する設問について、性別を答えることは構わないものの、答えられる選択肢がないことがストレスになるという声が聞かれた。つまり、性のあり方を適切に表現できるように設問や選択肢等を設計することが配慮につながると考えられる。

調査実施主体においては、配慮を目的として性別を尋ねる設問や選択肢の工夫の検討を始めることが多いと

¹⁶ 本調査結果を用いた選択肢「その他」に関する分析は、平森大規(2024)「性別を「その他」と回答する人はみな性的マイノリティなのか？—ジェンダー統計の精緻化に向けたクィア人口学的分析—」『国際ジェンダー学会誌』22, 52-65.も参照されたい。

考えられるが、配慮を目的とするのであればなおさら、適切に性のあり方を表現できるように設問および選択肢を用意することが配慮につながるという認識が広まるとよい。

(4) 【RQ4・RQ5】3ステップ方式の受容

3 ステップ方式が広まるとよいかどうかについては、6 割の回答者が前向きな回答をしており、受け入れられる可能性は一定程度あると評価できる。「わからない」との回答も全体で 2 割ほどみられたが、“慣れ”によって解消される部分もあるのではないかと。つまり、3 ステップ方式を目にしたり、実際に回答したりする機会が増えれば特に気にならないと感じる人が増えていくことが期待される。

一方で、3 ステップ方式が導入された場合にアンケートへの回答を完了するという割合は 8 割程度であった。この結果のみから 3 ステップ方式が回答率に与える影響を断定することは難しいが、ここでも“慣れ”の影響を想定すれば、導入可能性が一定程度認められるといえる。

(5) 展望

最後に、3 ステップ方式の導入にあたっては、実験的アンケート調査で検証した項目のほか、射程の広い理論的な課題およびニッチな技術的課題があることに言及しておきたい。

射程の広い理論的な課題とは、すなわち、アンケート調査で把握する性別とは何かという問題である。例えば、3 ステップ方式においては、戸籍性と現在認識している性別を把握することになるが、これらのいずれかが既存のジェンダー統計における「男女」と同義であるのかどうか、十分な議論と検証がなされていない¹⁷。この点に関連して、本実験的アンケート調査において収集した、アンケートで性別を尋ねられることに関する経験や意見を紹介したい。

- 回答欄に「その他」が用意されていたので「その他」と答えたらアンケートが終了してしまったことがあった。それ以来正直に答えるのをやめた。「その他」の人を弾くくらいなら二択でいい。
- 自分は性自認が男女どちらでもない。だから性別の選択肢に男・女しかない場合は非常に不愉快だし困っていた。そもそもアンケートをする側はなぜ性別を聞くのだろうか。知りたいのは戸籍の性か身体の性か自認する性か。それを明記しないと答えに困る人もいるのだ。しっかり明記してほしいし、それがアンケートの正確さを高めると思う。今回のような性別に関するアンケート(筆者注:本実験的アンケート調査を指す。)が行われたのは、自分にとっては非常に救いだ。社会は少しずつでも確実に進歩していると感じられた。

こうした経験は、冒頭のワーキング・グループの取りまとめにおいて提起された「性別欄の選択肢がこれまでどおり男性か女性の二択だけで十分であるか」という論点が、限定的であることを示している¹⁸。例えば、オーストラ

¹⁷ 釜野さおり(2024)「ダイバーシティ・インクルージョンと社会調査における〈性別〉—ジェンダー統計とクイア方法論の連携—」『社会学評論』74(4), 660-676. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsr/74/4/74_660/article-char/ja (外部リンク) (最終アクセス:2026 年 6 月 25 日)もこの点について言及している。

¹⁸ 内閣府「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度の把握及び理解増進に係る研究に当たり留意すべき事項等の調査・研究」(令和 6 年度内閣府委託事業)では、性的指向およびジェンダーアイデンティティをアンケート調査等で把握する際の留意事項を整理するため、全国から 16 の当事者団体にヒアリング調査を実施した記録が報告されている。アンケート等で性別

リアでは、sex と gender の存在を認めただけで、gender に関する統計の収集が重要であるという姿勢を示している。また、カナダの国勢調査では、2021 年の国勢調査から sex を把握する設問文に「出生時の」という文言を明示するようになっている。日本では行政において「ジェンダー統計」という言葉が用いられているが¹⁹、ジェンダーという言葉が何を指しているのかについて、今一度整理が必要だろう。

3ステップ方式が広まるうえでの技術的な課題としては、「設問数の制約」と「調査票・画面設計」の2点がある。「設問数の制約」とは、従来は1問しか設けていなかった性別の確認に3問を要するようになると、調査に必要な予算が膨らむ可能性があるという点である。「調査票・画面設計」とは、5(2)で述べたように3ステップ方式の1問目にある戸籍性のみが把握の対象と思われにくいよう、紙面上のレイアウトの工夫や、インターネット調査の場合は調査画面の工夫が必要となる点である。インターネット調査の場合については、実験的アンケート調査を通じて、「3問を同一画面上に表示する」「3問目を任意回答とする」といった工夫を凝らすことが可能であることが確認できた。ただし、調査会社やアンケートシステムによっては制約を受けると考えられる。こうした制約はあるものの、“慣れ”が進むことで3ステップ方式の採用が検討されるようになることを期待したい。

や性自認を回答する際の経験が記録されている。ぜひ参照いただきたい。

¹⁹ 例えば、内閣府委託調査「令和5年度・令和6年度 ジェンダー統計整備状況調査 総括報告書」https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/gender_toukei_r05.html (外部リンク) (最終アクセス:2026年6月25日)では、『ジェンダー統計の充実』は、調査票における男女の別欄の充実(と捉える:筆者加筆)」と記されている。なお、同報告書では各種統計における性別の定義に関する言及はない。より直近の動向として、第6次男女共同参画基本計画(令和8年3月13日閣議決定)では、「ジェンダー統計の更なる充実に向けて、人によってジェンダーアイデンティティの在り方が多様であることに配慮しつつ、その重要性について、周知啓発に取り組む。【内閣府、総務省】」と記載されている。少なくとも、男女共同参画の政策枠組みにおいては、性別(および性自認)の把握方法の開発や検証に取り組むとまでは踏み込まれていない、といえる。

－ ご利用に際して －

- 本資料は、執筆時点で信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一的な見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客さまの決定、行為、およびその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客さまご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所:三菱 UFJリサーチ&コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要ですので、当社までご連絡ください。